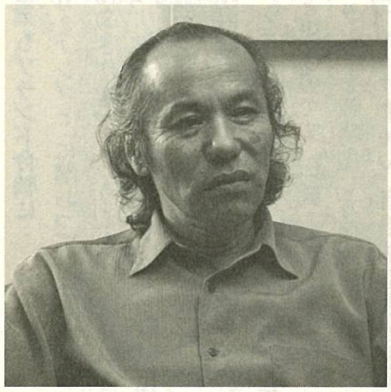
2006／秋

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―



■ 佐藤眞富
(株)木舎(ぼくしゃ)代表　プロダクトデザイナー。1987年、東京都あきる野市に木舎設立。主に照明器具のデザインを手掛け、個展、グループ展なども多数。2001年から美濃手漉き和紙を次世代に伝え、現代生活に取り入れるためのプロジェクト「カミノシゴト」のプロデュースを開始。産地の職人と東京市場との橋渡しをすべく、Ozone、Axis等で提案展を精力的に開催。2004年、美濃市相生町にアンテナショップ「カミノシゴト」オープン、今年若手職人に運営を引き継ぐ予定。

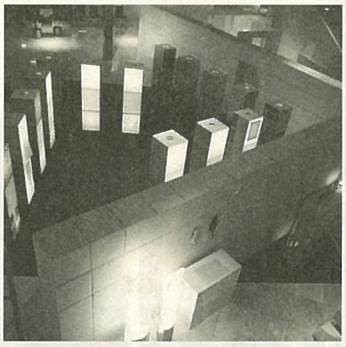
■佐藤眞富さん　（プロダクトデザイナー）
「暮らしを創造するコト、モノを考える」

●産地の問題点

七年ほど前、岐阜県紙業連合会が海外市場を狙い、フランクフルトメッセに美濃和紙のあかりを展示しようと企画した時、デザイン依頼が来たのです。デザイン料が安い代わりに、産地の中を自由に歩いても構わないと言われ、興味が湧きました。しかし、当時は正直言ってその仕事で使いたい紙がなかったのです。では、作ればいいのでは、と考えましたが、職人さん達もなかなか相手にしてくれない。仕方がないので、惚れ込んだ本美濃紙、薄美濃紙と他の紙を利用して「濃シリーズ」という商品ブランドを立ちあげました。これが美濃との出会いとなりましたが、仕事をしていく過程で産地の問題点も見せつけられてしまったのです。美濃和紙は昔から障子紙として有名ですが、それはこの土地の光や水など、美濃の風土があってこそ、その和紙が育まれたと思うのです。現在エコだとか地球に優しいとか、さも新しげにプロダクトの世界でも言われていますが、その割には先人達が育てた「日本の紙」は全うに使われてもいないし、その効能さえも適切に知らせる努力をしていなかったのです。

●売れないと言うけれど

まず、産地や職人さんは「売れない！」と平気な顔で言うけど、ある意味それはユーザーを無視しています。売れないことを、ユーザーや時代のせいにし、住空間の様式変化のせいにしている。それは単に、売れないのではなく、使ってもらえない、使えないというのが真実なのです。どうして使ってもらえないのか検証しないといけないのに、指をくわえてこの何十年間来たわけでしょう。美濃の手漉き和紙を残さないといけないと言うのなら、産地が今の若い職人達を食わせるストーリーを作らなければいけない。ところがここが勘違いで、ものを作れば、単に開発すれば食えると思うんですよ。紙を作れば売れると思うんです。今のユーザー、特に女性は和紙という素材には空間も含めて大きな興味を持っていて、情報誌も特集を組んでいます。だけど東京にはまともな和紙の店もほとんどないし、まして人は産地に来たこともない。だから美濃和紙なんて若い子は知らない。越前だって同じだと思うのです。知らなかったら選ばれようがない。ですから美濃和紙というブランドをあらゆる広報手段で伝え、広める仕事を最低五年間仕掛けるから、行政に掛け合ってほしいと紙業連合会のトップにお願いしたのです。



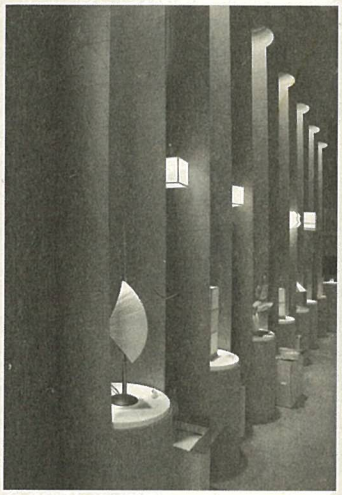
東京Ozoneでの「カミノシゴト」展
上・2002年
中・2004年
下・2005年

●行政ができるのは発信事業

地方のいいところは、まだ昔のような太っ腹の経営者がいることです。若手職人をまとめながら、様々な発信事業を行うのに行政を説き伏せる強烈なリーダーがいたのです。東京のオゾンでは計五回の「カミノシゴト」展、アクシスでは「御紙漉屋の障子展」など三回の発信を仕掛け、会場に来てくれた出版社との繋がりを通じて「カミノシゴト」という本の出版や、グラフィックデザイナーとは、「折型半紙1/2」という商品成果にも繋がりました。作り手側のこだわりをしっかり伝え、紙だけでなく道具に変化する魅力などもJ.ホームスタイルで発信しました。ひとつひとつを確実に展開して、美濃手漉き和紙は少なくともクリエーターの中には浸透し、知ってもらえたと思っています。職人達を東京の展示会にバスをチャーターして連れて行きました。会場で直接お客の反応を見て「これは問屋から聞いている話とはだいぶ違うなあ」という感覚も肌で分かってきました。そんなことでも五年かかるのです。要は五年間、産地の想いをつらぬくリーダーがいるかいないかは大きいですね。

●伝統産業もブランド合戦に

五年間「カミノシゴト」に関わって分かったのは、広報は種まき作業だということ。いまそれを確実に刈り取るには、産地ブランドを戦略化できる企業を導入すべきです。というのは、地方自治体再編成の流れの中で、観光地や伝統産業をかかえる行政は今後ブランド合戦になっていくと思うのです。伝統・風土・歴史など地方もブランドを戦略化し方程式化しなければ生き残っていけません。自治体も含めて産地も企業的な経営センスで、伝統産業をプロデュースしていかなければせっかくの価値ある日本の仕事が死んでしまうのです。産地の一人一人の能力を考慮し、創造的な役割を与えていく集団的知恵が必要です。そして何より私達の暮らしに必要な、物産ではない商品を提供することです。大切なことは、地域や産地や市場のしがらみを優先するのではなく、「伝統とは革新の継続」という概念に果敢に挑戦、実験するという姿勢ではないでしょうか。



美濃市中心部のアンテナショップ

■行政と協力し合う美濃和紙振興事業「イベントでシンボル効果つくり」

学芸員の須田亜紀さん

美濃和紙には一三〇〇年の歴史があり、なんと言っても最高級の障子紙として広く名を知られる。歴史から派生した家庭紙、加工紙等の機械製紙業も盛んで、美濃市の和紙振興事業には岐阜県紙業連合会をはじめとする業界団体もバックアップしている。今秋で十三回目を迎える「美濃和紙あかりアート展」をはじめ、十周年の節目を迎えた「アーティスト・イン・レジデンス」事業など息の長い振興事業は、一般人やデザイナーの「美濃和紙」認知度を高め、観客動員数も多い。産地の情報発信拠点のひとつ、平成六年に市政四十周年を記念して開設された「美濃和紙の里会館」の学芸員、須田亜紀さんに美濃和紙プロモーションの運営体制や事業の全体像を伺った。

●「美濃和紙あかりアート展」

九十四年から始まったこのイベントは、毎年十月の体育の日の前の土日、市中心部の「うだつの上がる町並み」で開催される。名古屋圏を中心に毎年七万人ほどの観光客が押し寄せ、古い町並みに並ぶ幻想的なあかり展のにぎわいは、テレビニュース等で何度も紹介されている。このイベントは美濃市観光協会が事務局となって管理運営しているが、多くの市民ボランティアの協力も欠かせない。展示される照明器具や灯りのオブジェは全国からの公募で毎年六百点近い応募がある。二〇〇五年にはこれらの作品を常時観賞できるように「美濃和紙あかりアート館」をオープンさせ、あかりショップも併設させた。

美濃和紙あかりアート展の模様

●アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」

「美濃・紙の芸術村」事業は、毎年国内外の五、六名の芸術家が三ヶ月間、市内でホームステイしながら、創作活動や交流活動を行うもので、一九九七年から始まり、今年で十年目を迎える。参加者には、渡航費、滞在費、材料費が支給される他、ホストファミリーにも多少の補助があるという。古い卯立の町屋を工房として借用し、先の「美濃和紙あかりアート展」、十二月の美濃和紙の里会館の企画展に出品する作品の制作を行う。参加者の出身国はアイスランド、ノルウェー、ベネズエラ、クロアチア、イスラエル、フランス、ポーランド、台湾などバラエティに富んでいるが、中には和紙に触れるのは初めてという人も。滞在期間中、漉き場の見学、地元小学校でのワークショップや市民との交流会、芸術家同士の交流など、和紙を通しての国際交流はすっかり市民にも定着した。当初は五年間の文化庁の助成があったが、二〇〇二年から美濃市の単独事業。事務局は教育委員会文化振興課が担当しているが、滞在期間中の運営はボランティアからなる実務委員会があたっている。様々な国からの参加芸術家と地域住民との交流により、国際的な美濃市のPRに努めている。

美濃・紙の芸術村の参加者たち

●「美濃・手漉き和紙基礎スクール」

美濃和紙の伝統を伝え、愛好者を増やすため、また、産地のPRを図るとともに後継者育成の土壌作りを行うため、平成九年から始められた事業で、美濃和紙の里会館が企画・運営を担当している。研修期間は一ヶ月十六日間。カリキュラムは、楮の栽培畑の見学、職人の工房や製紙工場の見学、産業技術センター紙研究部での講義などのほか、美濃和紙の里会館職員の伝統工芸士の指導による原料処理、紙

漉き、乾燥、選別などの実習から成る。ここの特長は、手漉きだけに限らず近代的な機械生産の知識や紙の科学的な知識も教えていることだ。研修受講費は、一人三万円。毎年、五～十数名の研修生の割合は女性の方が多いが、男性は仕事のためや学生が多いようだ。戦後数十軒あった手漉き和紙職人の工房は現在十五軒、三十～四十人程度、職人の平均年齢も七十歳前後と高齢化している現在、後継者育成の足がかりになればと思われる。

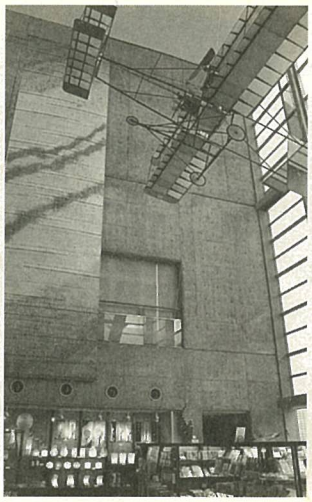
手漉き和紙スクールの実習

●デザイナーとの繋がり

美濃といえば、デザイナーとの繋りが深い。九四年、産地の拠点として「美濃和紙の里会館」が開設された折に、広報をかねて「美濃和紙によるグラフィックアート展」を企画開催した。日本の著名なグラフィックデザイナーに作品出展を呼びかけた。最初は手漉き和紙にシルクスクリーンによる作品展、九七年には「アート提灯展」、九九年は「国民文化祭・ぎふ９９」にも当たり「美濃和紙茶室とグラフィックアート掛軸展」へと発展させた。出展作家には作品と作品図録がデザイン料となるのだが、デザイナーには大変好評。この時の人脈が、年間八回にも及ぶ美濃和紙の里会館の企画展にも活かされている。

●美濃和紙の里会館

三フロアある会館は、映像室、常設展示室、図書室、企画展示室、ワークショップ（紙漉きの実演・体験）、創作室、ショップやレストランも併設されている。また、美濃手すき和紙協同組合を含む岐阜県紙業連合会の事務局もあり、紙にまつわる企画作りや相談事には何かと便利だ。年間約八回行う企画展を始め、様々なイベントも行われる。十年前から公募展になった「全国和紙画展」も現在は、和紙絵部門とアート部門の二部門で公募され、和紙の特性を活かした独創性あふれる作品が多く集まる。また、紙すき体験は学校の体験学習や観光客からも人気が高い。ちなみに美濃市内の小中学校の卒業証書はすべて自分で漉いた和紙が使われている。開館当初には年間七万人の来場があったが、十二年目を迎える現在でも四万人程の来場者を迎え入れている。

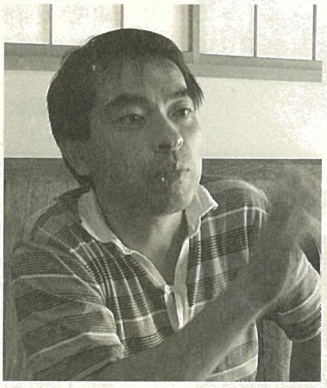

和紙の里会館のふきねけ

美濃市の肩入れの強さもさることながら、「美濃市では毎年この時期にはこれをやっているというのが市民にも定着していて、ボランティアの皆さんも活動の場が多いのですが、本当に意欲的に参加してくれています。」と須田さんは語る。いずれも十年以上続けてきた事業の総体が美濃ブランドを知らしめている。

漉き場探訪

「情報系の和紙から広がった得意分野」
■石川浩さん　石川製紙（株）

石川浩さん



石川製紙は、江戸時代から紙漉に従事し、一時は酒造業に転向したが、昭和七年に手漉き和紙業を再開。昭和三十六年に石川製紙株式会社設立を機に手漉き和紙から機械抄き和紙の生産に転換。襖、箱張り・小間紙用和紙に加え、様々な印刷用途に対応できる和紙生産に得意分野を拡大してきた。社員は総勢二九名。社長の石川浩さんにお話を伺う。

●印刷できる和紙の開発

一般的に和紙は印刷の色が沈むとか、紙むけ発生などで、今の印刷機械に対応できないのではないかと敬遠されがちです。そこで当社は印刷できる和紙の開発に力を入れてきました。昭和五十年代に、出版業界では復刻ブームがありまして、著名な文芸作品の表紙や扉に和紙を使いたいという需要がありました。その折、楮や三椏、雁皮など昔ながらの風合いを持ち、価格もこなれていて、尚かつ大量印刷にも対応できる和紙を随分研究しました。現在でも文藝春秋、講談社など文芸や小説分野に強い出版社の需要が多いのですが、時にはベストセラーが出ることがあります。立花隆さんの「田中角栄研究」という本もそうでしたが、何トンという紙を生産する時は、洋紙にはないしっとり感を出さなくてはならない反面、洋紙の様に多色印刷が可能であり、ロットのムラがなく、品質管理ができることが前提となってきます。大変、神経を使うところです。永年生産してきた紙の様々なデータを記録して整理しておりますので、その蓄積がノウハウとなって、新しい紙の開発につながっております。

●文化財複製用和紙

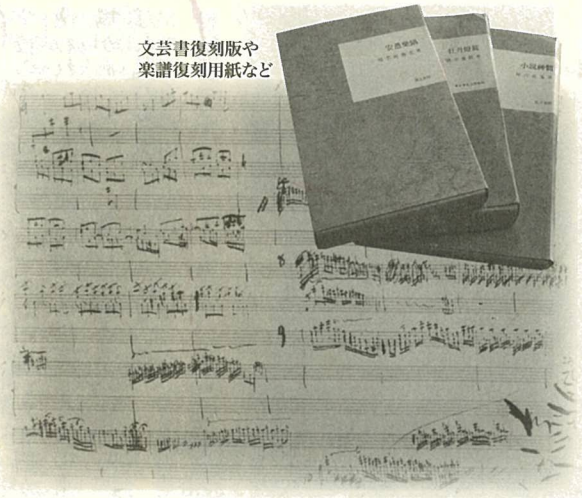
最近は復刻用の文化的な和紙の需要が増えてきています。博物館や美術館の限定レプリカもの寺社仏閣の襖絵、掛け軸の復刻に使用する復刻用紙です。著名な絵も多いのですが、例えば、南禅寺所蔵の重文、狩野探幽の「群虎図」、兵庫県香美町の大乗寺所蔵、円山応挙門下の長沢芦雪の「群猿図」などのデジタル再製画（精巧なレプリカ）用の和紙も手掛けています。面白いのは、いつの時代のものを複製にするのかで紙質や風合いを変えなくてはならないということがあるのです。今現在ある状態を

文化財の復刻用紙

複製するのか、元の原本の状態通りに複製するのかで、印刷方法も変わり、それに伴って復刻用紙の品質・風合いが決まっていきます。余談になりますが、修行僧のちょっとした襖の落書きなどが、貴重な資料になる場合があるのだそうです。この落書きはオリジナルではないが残そうとか、資料として複製対象にするとかいろいろな角度で検討し、複製する年代を決定するそうです。最近、この分野での複製・文化事業にはインクジェットで印刷する方法に力を入れています。京都などにはお寺が多く、それこそ数百枚という襖絵があるのですから、大きなマーケットになるようです。インクジェット印刷はメーカー側からすると、紙は一枚だけあればいいのですから紙の出荷量が伸びず、売上が少なくなるかなとも思いますが(笑)、発注者側から言うと、デジタルデータを一度起こしておけば、万が一、複製品がダメになっても、又作り直してすぐに入れ替えることができるのがメリットですね。本物はちゃんとした場所に収蔵しておいて、展示用にはこの複製画を使用しているところも多いのだそうです。

●イベント用和紙

印刷用和紙、文化関連和紙と力を入れてきていますが、もう一つ文化的な催事などで使うイベント用和紙の開発もはじめました。鳥の子が主流ですが、博物館、美術館のイベント展示のしつらえに使われます。昔は一般に市販されている鳥の子を使っていたのですが、現在はやはり展示内容をよく考えたディスプレイデザインに基づき、張る紙を選定したいとニーズがあるようです。現在、引き合いのある紙は、しっとりした和調の雰囲気のものが中心で、色合いも百種類くらい、しかも施工しやすく、紙の伸び縮みが少なく、強度のある紙というものでした。商談の中で、和紙の面白いところは裏と表では表情が違うので、同じ紙を使い分けてはいかがですかと提案したところ大変喜ばれ、受注に一歩近づいているようです。



文芸書復刻版や
楽譜復刻用紙など

また、最近は金箔用原紙(金屏風や金箔を貼る壁紙のベース用紙)の中国向けの引き合いもあります。あちらは建設ラッシュで、豪華なホテルなどに金ぴかの金箔を貼った壁紙が好まれるようで、その原紙です。原紙の強度不足だったり、表面に傷が付くとすぐクレームなので難しいのですが・・・。和紙もこれから日本だけのマーケティングだけではなく、海外でも使えるように工夫していかなくてはいけないのかもしれませんね。あくまで和紙の良さを損なわないようにして、国際化をめざすべきなのでしょうね。

情報欄

●イベント情報

■越前和紙展
時:9月30日(土)～10月29日(日)
場所:紙の文化博物館

■平山郁夫展
時:9月30日(土)～10月29日(日)
場所:越前市いまだて芸術館

■平安の雅を伝える王朝継ぎ紙展
時:9月30日(土)～10月29日(日)
場所:卯立の工芸館

■源氏物語と紙展
時:9月30日(土)～10月29日(日)
場所:今立歴史民俗資料館

■東京えちぜん物語
時:10月11日(水)～10月14日(土)
場所:東京都港区エコプラザ
「素の紙展」「墨流し・紙漉き体験」「和紙製品即売」

■素の紙展
時:10月11日(水)～10月14日(土)
場所:東京都港区エコプラザ

■近畿工芸品フェア
時:10月20日(金)～10月22日(日)
場所:京都西陣会館

■伝統的工芸品月間国民会議全国大会行事
時:11月2日(木)～11月5日(日)
場所:小松市、金沢市　他

■第19回源氏物語アカデミー
時:10月27日(金)～10月29日(日)
場所:武生パレスホテル他
お問い合せ・お申し込み:源氏物語アカデミー委員会
Tel & fax: 0778-23-3374

※源氏物語にまつわる和紙の講演と展示見学。
申込み要予約。

編集後記
かねてからブランド発進力のある美濃和紙には興味を持っておりましたが、今回取材をすることができました。様々の取組を長きにわたって粘り強く行っている関係者のご努力と美濃の市民パワーの有り様には様々のヒントがあったような気が致します。有り難うございました。(よ)

素の紙展

時　:2006年10月11日(水)～14日(土)
　　11:00～19:00(最終日は16:00まで)
場所:東京都港区エコプラザ「東京えちぜん物語」会場内
　　東京都港区虎ノ門3-6-9(日比谷線神谷町駅より徒歩5分)

■ミニセミナー
「インテリアに和紙を使う」10月13日(金)17:00～19:00
経師屋さんによる和紙インテリアの魅力と施工法講演

住宅の内装やインテリアなど、現代的な空間にも活かしていただきたいモダンなで暖かみのある和紙を展示します。又和紙インテリアの魅力と簡単な施工法をお伝えするミニセミナーも同時開催。どうぞご覧下さい。

季刊-和紙だより　第12号(2006年秋号)　発行日:2006年9月30日
※無断での転写・転載はお断りいたします。
発行人:福井県和紙工業協同組合　山田益弘　住所:福井県越前市大滝町11-11　TEL:0778-43-0875　FAX:0778-43-1142
編集人:右衛門佐美佐子事務所　右衛門佐美佐子・北條崇・田中裕子　編集所:〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL:075-712-8834　FAX:075-702-6223